福岡市埋蔵文化財調査報告書第1304集

原 遺 跡 20

－ 第34次調査 －

２０１７

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから玄界灘を介したアジア各地との交流の玄関口として発展してきました。地中に埋もれた数々の文化財は、人々が歴史・文化を積み重ね、現在の地域・社会を形作る礎となったことを示す大切な資料です。福岡市教育委員会では開発などでやむを得ず遺跡が破壊される折には発掘調査を実施し、記録として残していけるよう努めております。

本書は、共同住宅建設に伴う原遺跡第３４次調査の報告です。中世の集落跡などを発見し、古くから人々がこの地で生活をしていたことが確認できました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りましたあなぶき興産九州株式会社様（現･穴吹興産株式会社様）をはじめとした関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成２９年３月２７日

福 岡 市 教 育 委 員 会

教育長　星子 明夫

例　言

1．本書は早良区原６丁目地内の共同住宅建設に伴い、平成 27（2015）年 10 月 13 日から 12 月 2 日に発掘調査した原遺跡第 34 次調査の報告書である。
2．遺構の実測・写真撮影は朝岡俊也・山崎龍雄が行った。
3．遺物の実測は朝岡が行った。
4．遺物の写真撮影は朝岡が行った。
5．製図は朝岡が行った。
6．本書に掲載した方位はすべて磁北である。
7．本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
8．本書に掲載した標高は都市再生街区基準点 2A770（H=5.616 m）を基準とした。
9．本書に使用した遺構略号は以下の通り。
SB　掘立柱建物　　SC　竪穴建物　　SD　溝　　SE　井戸　　SK　土坑　　SP　柱穴
11. 本書に関わる図面・写真・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
12. 本書の執筆・編集は朝岡が行った。

遺跡名	原遺跡	調査次数	34 次	調査略号	HAA － 34
調査番号	1526	分布地図図幅名	原 82	遺跡登録番号	020311
事前審査番号	27 － 2 － 90	申請地面積	2298.04㎡	調査対象面積	520㎡
調査面積	520㎡		調査地	福岡市早良区原６丁目 1188 番 15	
調査期間	平成 27（2015）年 10 月 13 日～ 12 月 2 日				

本　文　目　次

序
Ⅰ．はじめに
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境
　１．地理的環境 …… 2
　２．歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録
　１．調査の概要 …… 5
　２．掘立柱建物 …… 6
　３．竪穴建物 …… 6
　４．井戸 …… 6
　５．土坑 …… 11
　６．溝状遺構 …… 11
　７．不明遺構 …… 15
　８．柱穴 …… 15
　９．その他の遺物 …… 16
　10．小結 …… 18

挿　図　目　次

Fig.1　原遺跡の位置（1/25000）…… 3
Fig.2　原遺跡調査区位置図（1/6000）…… 4
Fig.3　第 34 次調査区位置図（1/1000）…… 5
Fig.4　第 34 次調査区全体図（1/80）…… 折り込み
Fig.5　掘立柱建物（1/60）と出土遺物（1/3）…… 7
Fig.6　竪穴建物（1/40）と出土遺物（1/3）…… 8
Fig.7　井戸（1/40）…… 9
Fig.8　井戸および土坑出土遺物（1/3・6 のみ 1/4）…… 10
Fig.9　土坑および柱穴（1/40）…… 12
Fig.10　溝状遺構土層（1/40）…… 14
Fig.11　溝状遺構出土遺物（1/3）…… 15
Fig.12　SX101（1/60）と出土遺物（1/3）…… 16
Fig.13　柱穴出土遺物（1/3・45 のみ 1/4）…… 16
Fig.14　その他の遺物（1/3・53 のみ 1/2）…… 17

表　目　次

Tab.1　原遺跡発掘調査一覧 …… 4
Tab.2　土坑一覧 …… 11
Tab.3　溝状遺構一覧 …… 13
Tab.4　柱穴一覧 …… 17

図　版　目　次

PL.1　（1）調査区全景（東より）
（2）南壁土層（北西より）

PL.2　（1）SB296（北より）
（2）SD121・122（SB297 付属溝・北より）
（3）SD121 土層（北より）
（4）SD122 土層（北より）
（5）SC86（北東より）
（6）SD56 土層（北より）
（7）SD79 土層（南東より）
（8）SE37（北より）

PL.3　（1）SE37 土層（北より）
（2）SE57 土層（北東より）
（3）SE57（北より）
（4）SE57 断面（北東より）
（5）SE84（北より）
（6）SE85（南より）
（7）SE188 土層（南東より）
（8）SE84・85・SD79（北東より）

PL.4　（1）SK29 土層（北より）
（2）SK257（東より）
（3）SX101（北東より）
（4）SP70（北東より）
（5）出土遺物

Ⅰ.はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市早良区原６丁目1188番15における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成27年（2015年）４月23日付で受理した（事前審査番号27－２－90）。

これを受けて埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡に含まれていること、確認調査において、現地表下70㎝で遺構が確認されていたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成27年10月７日付であなぶき興産九州株式会社（現・穴吹興産株式会社）を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年10月13日から発掘調査を、翌平成28年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

２．調査の組織

調査委託：あなぶき興産九州株式会社（現・穴吹興産株式会社）
調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査　平成27年度）
調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
調査第２係長　榎本義嗣
調査庶務：文化財部埋蔵文化財審査課管理係　横田忍
事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係文化財主事　大森真衣子
調査担当：埋蔵文化財調査課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
埋蔵文化財調査課調査第２係文化財主事　山崎龍雄
発掘作業：浅井伸一　池静子　石井純子　井上節子　木藤勝子　田中昭子　中村敬子
中村秀策　西藤勝喜　樋口知徳　松丸敏子　馬奈木留雄　山田輝人　吉野一憲

（整理・報告　平成28年度）
整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第２係長　加藤隆也
整理・報告庶務：埋蔵文化財課管理係　横田忍
整理・報告担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
整理作業：執行恭子

Ⅱ. 遺跡の立地と環境

1．地理的環境

原遺跡は二級河川室見川などの河川が形成した沖積扇状平野である早良平野の室見川中流東岸に位置する。遺跡の西側を金屑川、東側を油山川（稲塚川）が流れ、それぞれに沿って南北に形成された2本の自然堤防（東側を微高地A、西側を微高地Bとする）とその間に挟まれた低湿地に立地する。なお、中世以前には遺跡の北側600m程まで潟湖が入り込んでいたと推測され、海までの距離が近い様相を呈した。

油山川を挟んだ東側には原東遺跡が、さらに東側には早良平野の東端を画す飯倉丘陵上に飯倉遺跡群が立地する。また遺跡の西側には標高10m前後で八つ手状を呈する洪積台地上に有田遺跡群が立地する。

2．歴史的環境

原遺跡は旧石器時代から中近世にかけての遺構・遺物を検出する複合遺跡である。古い時代では特に弥生時代早期から中期にかけての集落跡や、古墳時代前期の水利遺構などが注目でき、古代では遺跡内北側を東西に官道が通ると推測され、10次調査ではその側溝とみられる大溝が検出された。

以下では第34次調査で検出した遺構・遺物の中心年代である中世を詳しく述べる（「小結」も参照）。

中世前期で、原遺跡がまず盛行するのは12世紀前半～中頃である。この時期に中心となるのは遺跡の南側東寄りだが、12世紀後半には北東側に中心が移動する。13世紀後半～14世紀前半には縮小し、25次調査等でわずかに当該期の建物等がみられる。周辺では藤崎遺跡（12世紀後半～13世紀前半）、有田遺跡群（10世紀～）、次郎丸遺跡（10世紀～13世紀前半）、田村遺跡（10世紀～14世紀前半）等で中世集落が盛行し、また早良平野南側では東入部遺跡（10世紀～）、安通遺跡・岩本遺跡（11世紀後半～14世紀前半）、重留遺跡・清末遺跡（12世紀～14世紀後半）、四箇古川遺跡・四箇船石遺跡（11世紀後半～14世紀）等で集落が盛行する（田上2013）。野芥荘（1176年初見・八条院領）・入部荘（1454年初見・安楽寺領）等の荘園（阿部他編1997）との関連が注目され、また清末遺跡を元寇の勲功で肥前国の田畠等を配分された早良郡地頭・御家人の榊定禅の居館とする説もある（柳田1992）。飯盛山山頂の瓦経塚（12世紀前半）や、飯盛神社文殊堂のあたりに13世紀末に創建された真教院（真言律宗）等との関連も注意すべきだろう。

中世後期では、原遺跡の南西側で大溝に囲まれた方形区画が形成される。地点ごとに中心年代はやや異なるが、14世紀後半～16世紀前半のもので、福岡市博物館所蔵『小田部文書』の「金丸孫七田地売地券」文明三年（1471年）に記載のある金丸氏との関連が指摘される。大溝からは板碑や宝篋印塔の部材、西洋人をモチーフにした磁器人形等も出土し、注目できる。遺跡東側では、12次地点を中心に16世紀の遺構・遺物が分布する。周辺では有田遺跡群、次郎丸高石遺跡（14世紀後半～）、野芥遺跡（15世紀～16世紀前半）等で遺跡が展開し（田上2013）、野芥遺跡の庭園遺構と八角建物（14世紀後半～15世紀前半？）は16世紀初頭の文書に記述のある野芥大聖寺との関係が指摘される。早良平野南側では東入部遺跡が継続する（～16世紀前半）。また周辺の城として有田遺跡群の小田部城、室見川西岸の都地城と飯盛山（382m）山頂の飯盛城、東入部南東の荒平山山頂に立地する安楽平城とその出城と考えられる菟道岳城等がある。

なお、室見川東岸域では古い地図（裏表紙）をみてもわかるように、室見川・金屑川・油山川間を横断して水路が多数流れる。今後はこれらの水路がいつまで遡るか、集落動態等を含め検討する必要があろう。

阿部猛・佐藤和彦編1997『日本荘園大辞典』東京堂出版
田上勇一郎2013「第8章　中世」新修福岡市史特別編『自然と遺跡からみた福岡の歴史』
柳田純孝1992「元寇と考古学」『季刊考古学39』

Fig.1　原遺跡の位置（1/25000）

Tab.1　原遺跡発掘調査一覧

次数	年度	主な内容	報文
1	S50	杭列・水田？・溝（弥生早～中期・古墳前期・中世前・後期）	市報 492
2	S54	溝（弥生中期）、土坑（古墳前期）、集落（中世前期）	市報 544
3	S54	溝・杭列（弥生前～中期、古墳前・後期、古代、中世前期）	市報 71
4	S55	土坑（中世前・後期）	市報 64
5	S56	集落（弥生中期・古墳）	
6	S57	土坑（古墳前期）、集落（中世前期）	市報 213
7	S57	集落（中世前期）	文化財だより 3
8	S59	甕棺墓（弥生中期）、溝（古墳）、集落・墓（中世）	
9	S59	竪穴建物・溝（弥生中期）、溝（古墳前期）、館（中世後期）	市報 140
10	S62	土坑（弥生前期）、官道側溝（古代）、集落（中世前期）	市報 215
11	S63		市報 266
12	S63	集落（中世後期）	市報 233
13	S63	竪穴建物（弥生中期）、土坑（中世前期）	市報 233
14	H1	竪穴建物（弥生中期）、集落（中世前期）	市報 295
15	H1	溝（中世前期）	市報 266
16	H3	集落（弥生前期）、集落（中世後期）	市報 337
17	H7	土坑（弥生前・中期）、竪穴建物（古墳？）、溝（中世前期）	市報 444
18	H7	建物・溝・土坑（中世前期？）	年報 10
19	H8	集落（中世前期）・鏡埋納土坑（中世後期）	市報 917
20	H11	集落・瓦質土器・鋳型（弥生中期）・溝？（中世前期）	市報 688
21	H12	集落（中世前期）	年報 15
22	H15	溝･土坑（弥生中期･古墳前期）､溝（中世前期）､館（中世後期）	市報 818
23	H18	土坑・溝（古墳後期・古代～中世前期）	年報 21
24	H20	溝（中世後期？）	年報 23
25	H21	土坑（弥生後期）、集落（中世前期）、土坑・溝（中世後期）	市報 1129
26	H22	集落（弥生早～前期）、集落・墓（中世前期）	市報 1167
27	H22	館（中世後期）	市報 1168
28	H23	竪穴建物・土坑（弥生早～前期）、集落（中世前期）	市報 1199
29	H23	集落（中世前期）	市報 1200
30	H23	石匙（縄文）・溝（弥生）、建物・溝（中世前期）	市報 1199
31	H23	溝（弥生）、建物・溝（中世？）	市報 1201
32	H24	溝･土坑（弥生早～中期･古墳後期）､溝･井戸（中世前･後期）	市報 1236
33	H26	甕棺墓（弥生中期）、集落（中世）	
34	H27	集落（古墳中・後期・中世前・後期）	本報告

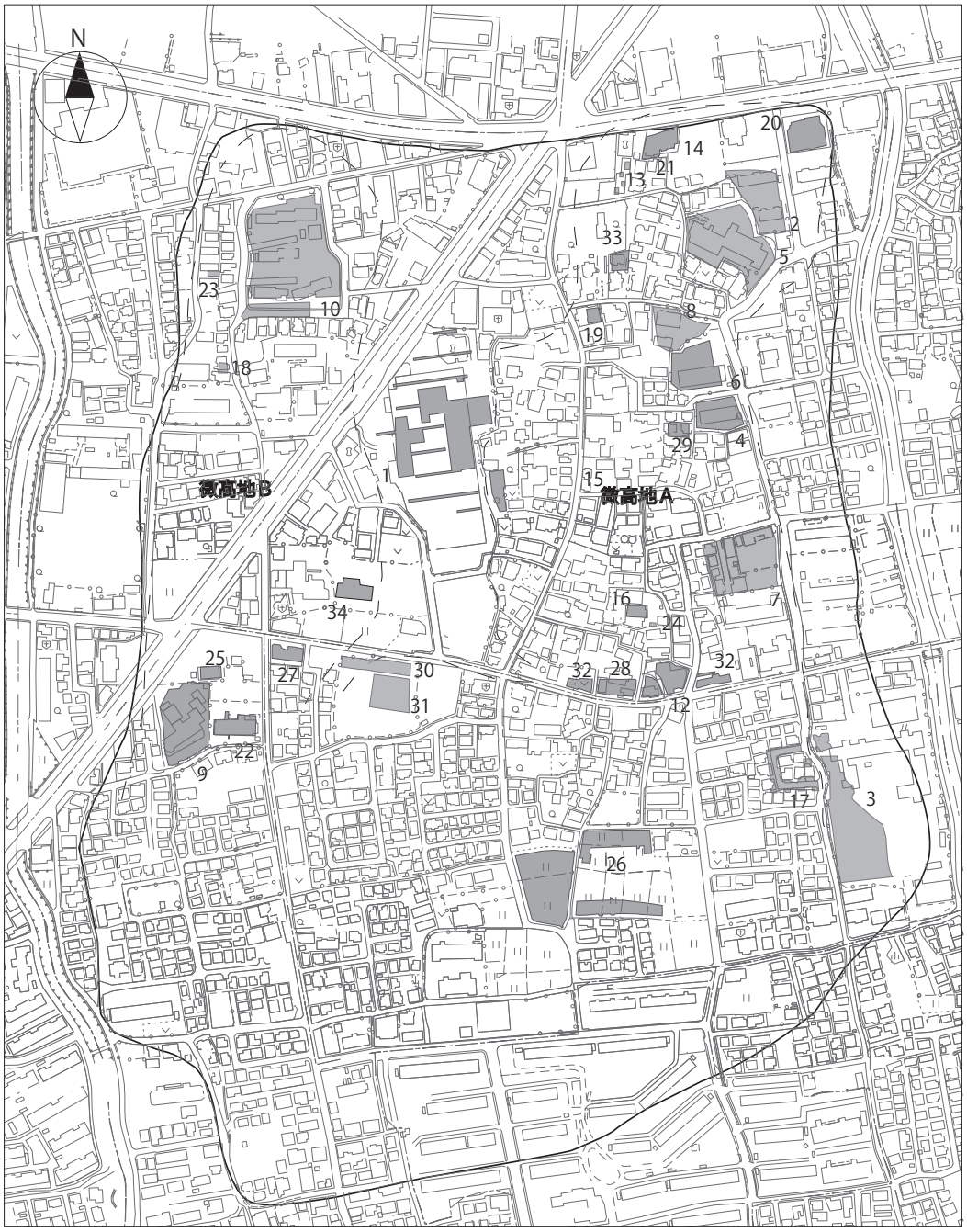


Fig.2　原遺跡調査区位置図（1/6000）

※アミカケは撹乱および自然痕跡

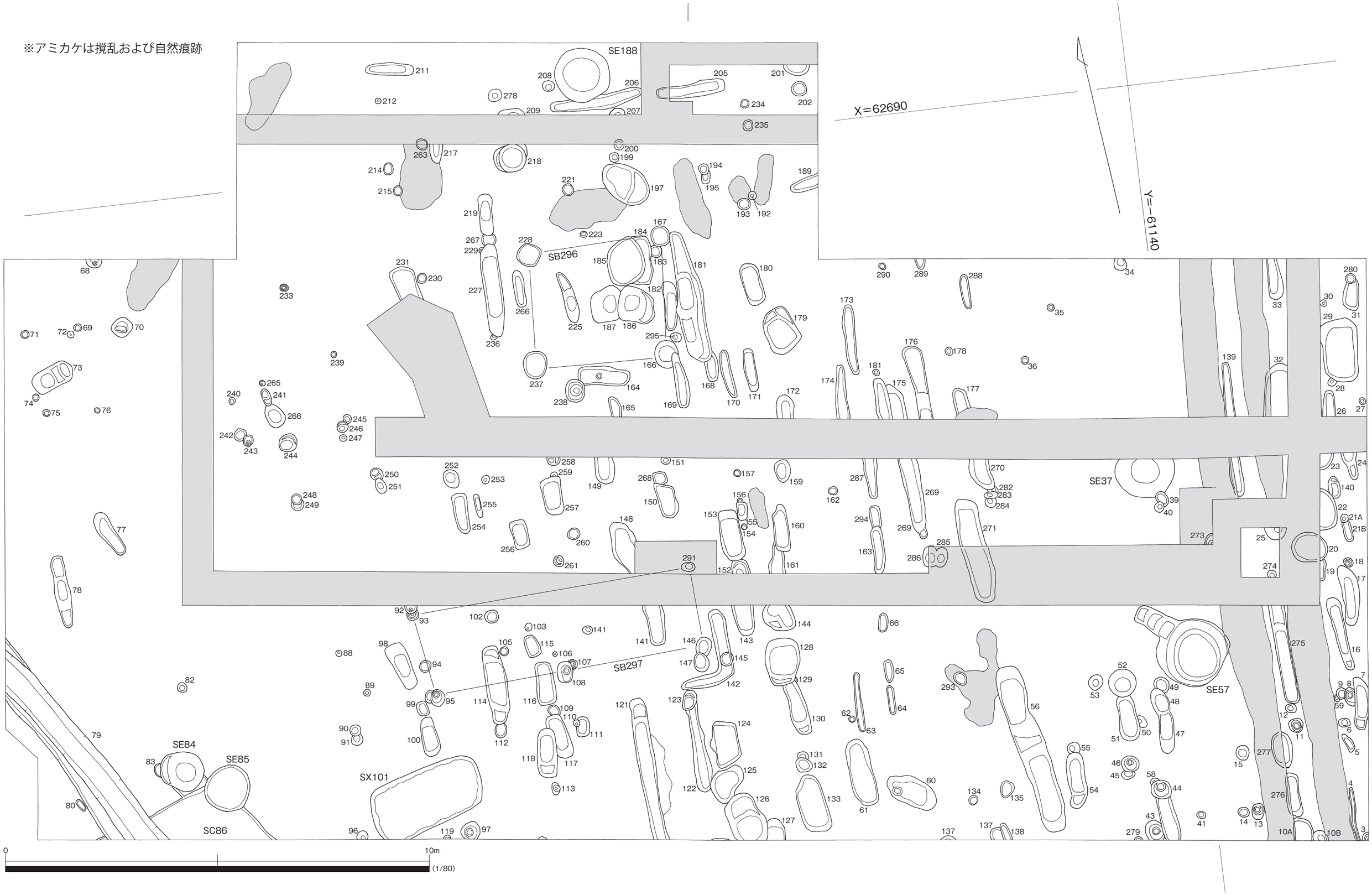


Fig.4　第34次調査区全体図（1/80）

Ⅲ. 調査の記録

1．調査の概要

第 34 次調査区は原遺跡の中央西寄りに位置し、遺跡内を南北に伸びる二つの微高地のうち西側微高地の東斜面にあたる。北東側に近接する 1 次調査地点は微高地間の低湿地のため、本調査区のすぐ東側から谷部へ落ちるのだろう。本調査区の調査面積は 520㎡である。地表下 60 ～ 90㎝で粒上の酸化鉄・マンガンが沈着する明黄褐（10YR）～灰オリーブ（5Y）色の締まりのあるシルト質粘土層に達し、これを地山とみなした。遺構面の標高は 5.10 ～ 5.25m でほぼ平坦だが、調査区西側の遺構密度が東側に比べ極端に薄く、元々西側が高かった地形を平坦化する際、西側を多く削ったと考えられる。南壁の土層観察では水田耕作土であろう灰色粘質土が西から東へ段々と少しずつ落ちる様子が確認でき、その上面のレベルは西側が 20㎝程高い。水田耕作土からは近世陶磁器も出土し、近世には水田化がなされたと推測できる。

調査開始時に遺構面を精査した結果、遺構の埋土が明確に 3 つに分かれていた。以下、暗褐色（7.5YR3/3）の埋土を埋土 A、黒褐色（10YR2/3）の埋土を埋土 B と表記する。また灰色（N5/ ）の土で埋まる遺構もあったが、これはビニール片などを含み、ほとんどが近現代の水田に伴う耕作痕（攪乱）と考えられる。本来は攪乱も全て図化し、遺構の損傷状態なども記録すべきであるが、南東側など場所によって細かな攪乱が遺構と激しく切りあい、図が乱雑になるため、主要なもの以外の攪乱は図化していない。

本調査区で検出された遺構は掘立柱建物 2 軒（古墳時代 1 軒・中世 1 軒）以上、竪穴建物 1 軒、井戸 5 基（うち明確なものは 2 基）および土坑・溝・柱穴が多数である。全体的な遺物量は少なくパンケース 5 箱ほどで、ほとんどが中世前期（龍泉窯系や同案窯系の青磁はわずかで、主に 12 世紀前半～中頃か）のものだが、弥生時代前期末～中期初頭・後期、古墳時代前期前半・中期前半・後期、中世後期、近世などの遺物もわずかに出土した。本調査区は従来の地形復元で低湿地と推測されることもあったが、東側の微高地がここまで広がっていたと明らかになり、さらに微高地の頂部付近で確認されていた中世や古墳時代の居住域も本調査地点まで広がっていたと明らかになったのは、本調査の重要な成果である。

Fig.3　第 34 次調査区位置図（1/1000）

２．掘立柱建物

SB296（Fig. 5　PL. 2）

調査区北側で検出したSP166・167・228・237からなる１×１間の建物である。埋土は埋土Ｂで、遺構検出時から明確に建物と認識できた。埋土Ａの溝状遺構（SD181・169）に切られる。当初はSP218も埋土がＢで径が近いので、１×２間以上になる可能性も考えたが、SP218の対となる柱穴はなかった。柱穴の径は45～65㎝で、土層観察の結果、柱の径は20～25cm。掘り直しは確認できなかった。柱の芯々距離は南北が2.8～3.0m、東西が3.1m。南北の軸は磁北より10°東に振る。

出土遺物は土師器細片と黒耀石片がわずかにあるのみで、図化できるものはない。ただし、薄手で内面ケズリの土師器片があり、古墳時代前期のものか。周りの埋土Ｂの柱穴で古墳時代前期前半や中期前半の土師器が出土していること、また後述する古墳時代中期～後期の竪穴建物の存在などから、建物の時期は古墳時代のどこかだろう。

SB297　SD121・122・142（Fig. 5　PL. 2）

調査区南側で検出したSP93（92）・95・107（108）・146・291からなる東西6.5m、南北2.0mの１×２間以上の建物。攪乱で失われた柱穴もあり、少し強引だが、並行するSD121・122及びＬ字状に屈曲するSD142と軸を揃え、SD142の屈曲の内側にちょうど建物の隅が合うため、建物と考える。柱穴も溝も埋土はA。柱穴の径は25～50㎝で、一部の柱穴で認められる柱の径は15～20㎝。一部の柱穴が二つ重なり、図化できていないがSD142もＬ字状溝がややずれて二つ切りあうように検出されたため、建物が一度建て直された可能性が高い。柱の芯々距離は桁行で約3.2m、梁行で1.9～2.1mで、32次調査SB161と類似する。南北の軸はほぼ磁北。SD121は幅40㎝、SD122は幅30㎝、深さはともに20㎝程で並列する。SD142は幅30㎝程で、深さは10～15㎝。溝下層埋土の一部は地山ブロック主体土で、掘削後すぐに少し埋めた可能性がある。“塀”もしくは“垣”跡だろうか。

SB297からは土師器・瓦器・安山岩の破片が出土したが、量はわずかである。１は土師器埦高台部で、12世紀前半頃。溝からは土師器・須恵器・陶器片が出土したが、図化できるものはなく、また土師皿片があるが、底部の調整はわからない。２は不明陶器（？）片。白く光沢のない泡状の釉垂れがみられ、色調は器表が灰黄色（2.5Y7/2）、断面がにぶい橙（7.5YR7/4）。

３．竪穴建物

SC86（Fig. 6　PL. 2）

調査区南西側で検出され、調査区外に伸びる。壁溝や柱穴は検出できなかったが、平面プラン及び直立する壁の立ち上がり等から方形の竪穴建物（住居）と考える。平面で3.0×2.0m以上で、深さ20㎝程。軸は磁北から西に13°程振る。中世の井戸SE84・85及び区画溝SD79に切られる。

出土遺物は土師器・須恵器があるが、時期がわかるものは少ない。３・４は土師器。３は口縁部。小片で不確実だが復元口径は14.0㎝程で、外面にヨコミガキを施す。古墳時代中期前半頃の高坏か。４は高坏脚部で端部屈曲部に近い部分で割れる。古墳時代中期前半。５は須恵器蓋で６世紀後半～７世紀前半。厚手の甕の破片もあり、遺構の時期は６世紀後半～７世紀前半の可能性が高い。

４．井戸

SE37（Fig. 7・8　PL. 2・3）

調査区東側で検出した径1.4 m、深さ0.9 m程の井戸状遺構。上層は黒色土が、下層では黒色土と地山土が細かく互層状に堆積する。湧水や壁面の抉れはない。底部直上で土製鍋が出土したが、割れ重なった状

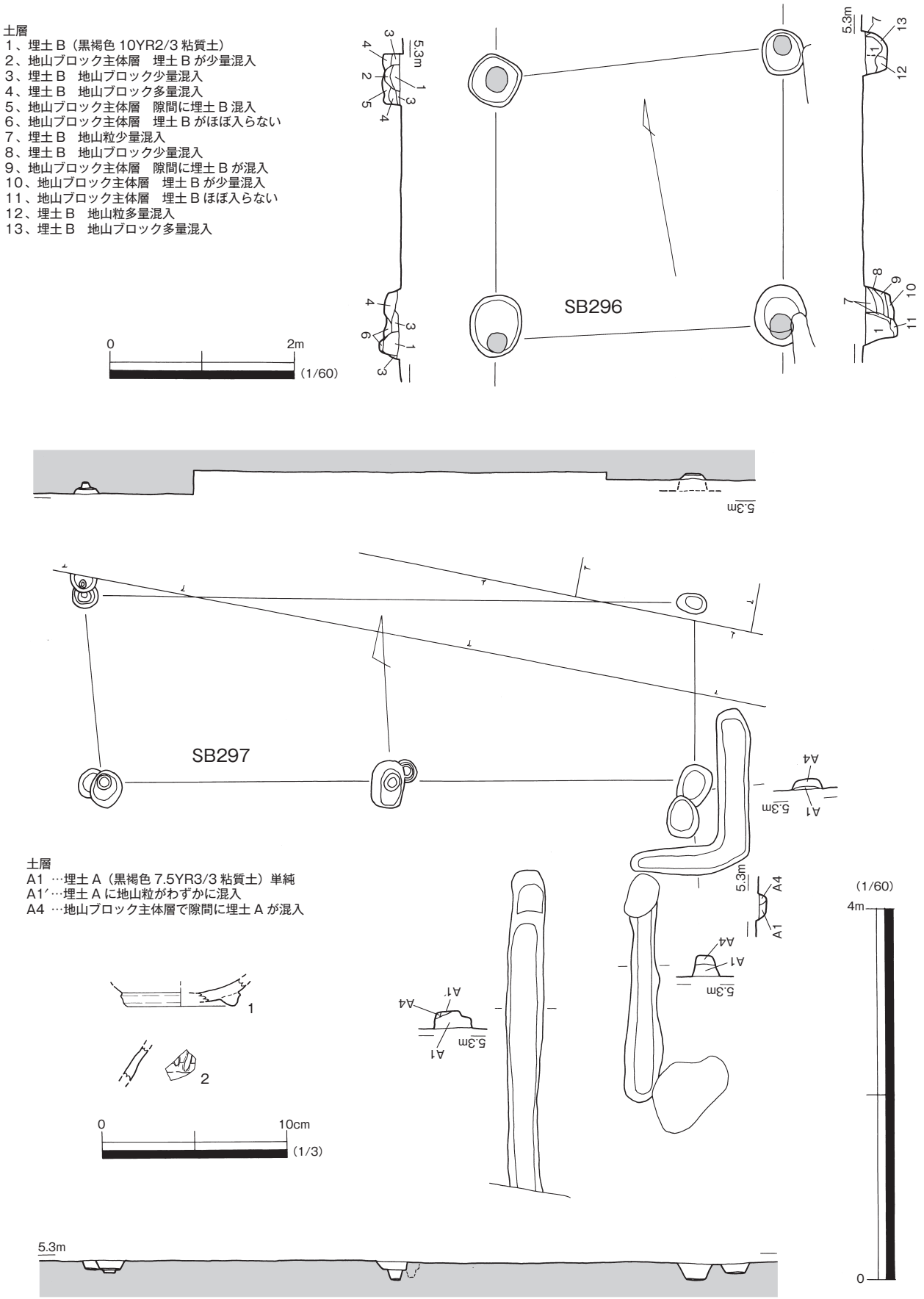


Fig.5　掘立柱建物（1/60）と出土遺物（1/3）

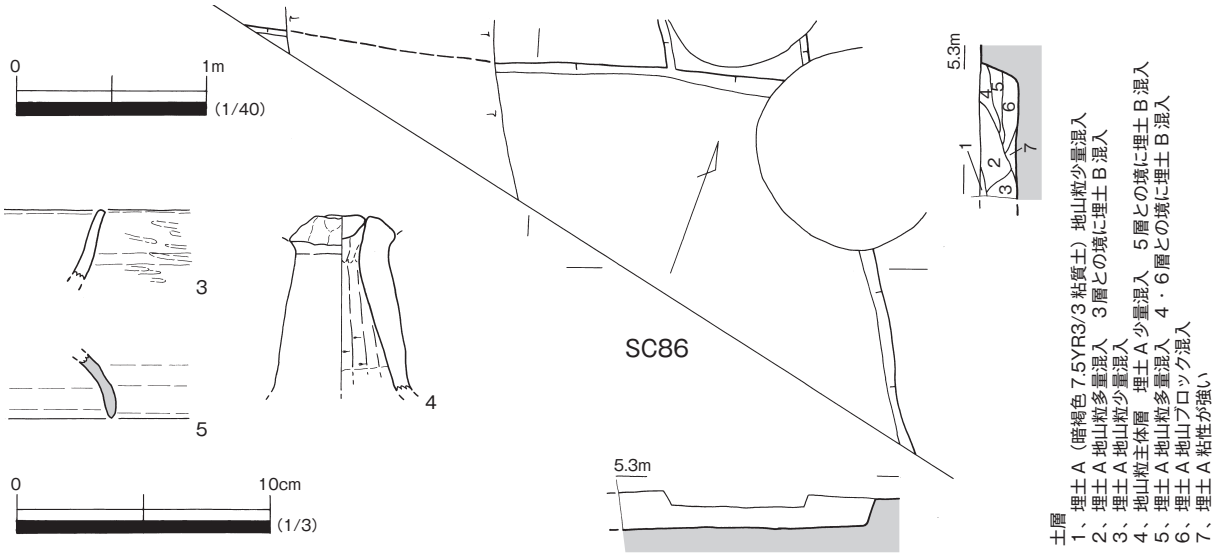


Fig.6　竪穴建物（1/40）と出土遺物（1/3）

態で、水溜として据えられてはいない。鍋は検出時、木質が付着していたが、取り上げられなかった。

出土遺物は弥生土器（複合口縁壺片）・須恵器・土師器（高台埦・糸切底部等を含む）・白磁・黒色土器Ｂ類・瓦器。6は土師質鍋。底直上で出土した。2/3程残存し、復元口径は47.8㎝。外面の口縁部以外の全面に煤が、内面中位から下位に焦げが付着する。７は黒色土器Ｂ類埦。８・９は白磁碗で、８はⅥ類か。９は傾きが不明確で、もう少し寝るかもしれない。遺構の時期は12世紀前半～中頃だろう。

SE57（Fig. 7・8　PL. 3）

調査区東側で検出した径1.7 m、深さ1.4 m程の井戸。深さ1.1 mで拳大の礫を含む砂層に達し、湧水する。上層は黒色土が、下層では層状に地山主体土が堆積する。南東側は壁面の抉れが顕著である。北西側に階段状の掘り込みがあり、井戸とともに埋まるので、掘削時の足場でなく、水汲み用の足場だろう。中層（5～7層）で長さ25～30㎝程の焼けた花崗岩が数個出土し（PL. 4）、井戸廃棄時の祭祀に伴うものか。

出土遺物は弥生土器・須恵器・土師器（丸底坏等）・白磁・青磁（同安窯系？）・瓦器・褐釉陶器。10・11は土師器。10が皿で、見込部がややでこぼこする。11が丸底坏。12～15は瓦器で、12・13が皿、14・15が埦だが、全て形態が異なる。15は外面に重ね焼きの痕跡がある。16～18は白磁碗Ⅳ類。16のみやや黄色っぽい（浅黄色5Y7/3）。18は底部がかなり擦り減る。19は須恵器で7世紀の壺か中世須恵器の鉢。外面に回転ヘラケズリ痕がある。20は弥生時代終末期の複合口縁壺で、紛れ込み。遺構の時期は12世紀前半～中頃だろう。

SE84（Fig. 7　PL. 3）

調査区西側で検出した径0.9m、深さ1.1m程の井戸状遺構。全体的に黒色土が堆積する。湧水はわずかで、壁面の抉れもない。３・４層の埋土は似るが、ブロックの入り方から縦に分かれ、上部に木製井戸枠が存在した可能性がある。底部付近で15㎝程の花崗岩と隅部に煤が付いた角状の安山岩が出土した（PL. 4）。

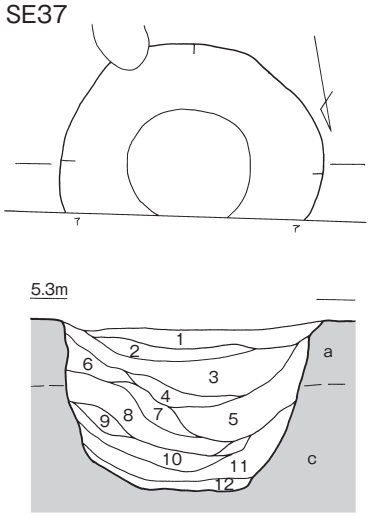
出土遺物は土師器の丸底坏片がある。遺構の時期は他の井戸同様に12世紀前半～中頃だろう。

SE85（Fig. 7・8　PL. 3）

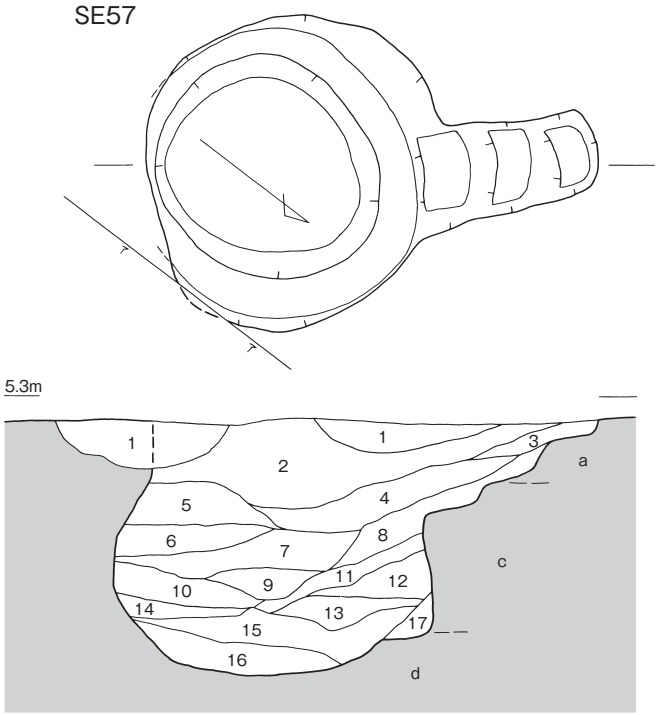
調査区西側で検出した径1.1m、深さ1.3m程の井戸。全体的に黒色土が堆積する。壁面はやや抉れ、激しく湧水する。15㎝程の焼けた花崗岩が出土した（PL. 4）。

出土遺物は土師器（古墳時代のものを含む）・瓦器・白磁。21は土師器坏で、口縁端部にススが付着し、灯明皿の可能性がある。22は白磁碗Ⅳ類。遺構の時期は12世紀前半～中頃だろう。

SE37



SE57

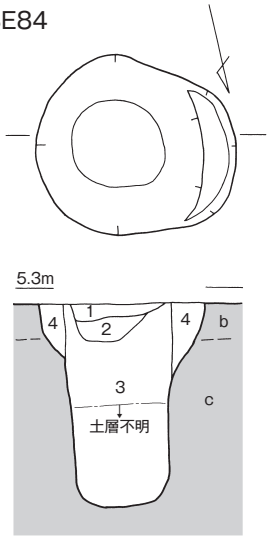


SE37
1、灰色土（近現代耕作土）
2、埋土Ｂ（黒褐色粘質土）地山粒少量混入
3、２層に近いが地山粒がやや多い
4、３層に近いがやや暗い
5、埋土Ｂ　地山ブロック少量混入
6、２層に近いがやや暗い
7、埋土Ｂ　地山ブロック多く混入
8、地山ブロック主体層　埋土Ｂが少量混入
9、埋土Ｂ単純層
10、地山ｂブロック主体層　埋土Ｂが微量混入
11、地山ｂと埋土Ｂの細かな縞状堆積
12、埋土Ｂ

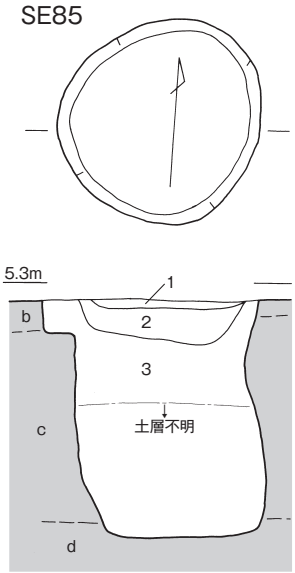
SE57
1、灰色土（近現代耕作土）
2、埋土Ｂ（黒褐色粘質土）地山粒混入
3、埋土Ｂ　地山ブロックがやや層状に混入
4、埋土Ｂ　地山粒微量混入
5、埋土Ｂ　地山ブロックがやや層状に多く混入
6、埋土Ｂ　地山粒微量混入
7、埋土Ｂ　地山粒混入
8、埋土Ｂ　大きめの地山粒がやや層状に混入
9、埋土Ｂ　地山ｂブロックが多量混入
10、12層ブロック主体層　埋土Ｂが少量混入
11、12層と埋土Ｂの細かな縞状堆積
12、にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3）酸化鉄沈着
13、地山ｂブロック主体層
14、13層に近いが埋土Ｂが少量混入
15、16層に地山ｂブロックが多く混入
16、灰色粘土（5Y5/1）
17、灰白色（7.5Y7/1）砂質シルト

地山
a…明黄褐色粘質シルト（10YR6/6）酸化鉄多く沈着
b…灰オリーブ粘質シルト（5Y5/2）酸化鉄多く沈着
c…灰白色粘質シルト（5Y7/1）酸化鉄多く沈着
d…黄灰色（2.5Y6/1）砂層　拳大の礫含む　境に面的に鉄分沈着

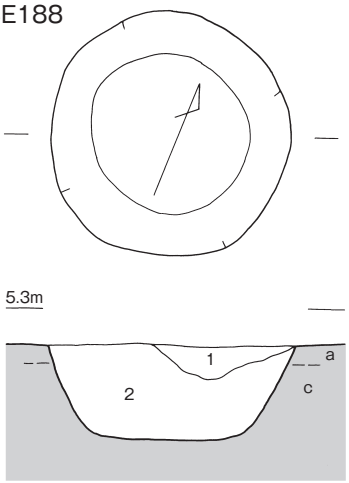
SE84



SE85



SE188



SE84
1、灰色土（近代耕作土）
2、埋土Ｂ（黒褐色粘質土）地山ブロック少量混入
3、埋土Ｂ　やや大きめの地山ブロックがやや層状に混入
4、３層に近いがブロックの入り方で境がある

SE84
1、灰色土（近現代耕作土）
2、埋土Ｂ（黒褐色粘質土）地山ブロック少量混入
3、埋土Ｂ

SE188
1、埋土Ｂ　地山ブロック少し混入
2、埋土Ｂ　大きめの地山ブロック多く混入

0　2m
（1/40）

Fig.7　井戸（1/40）

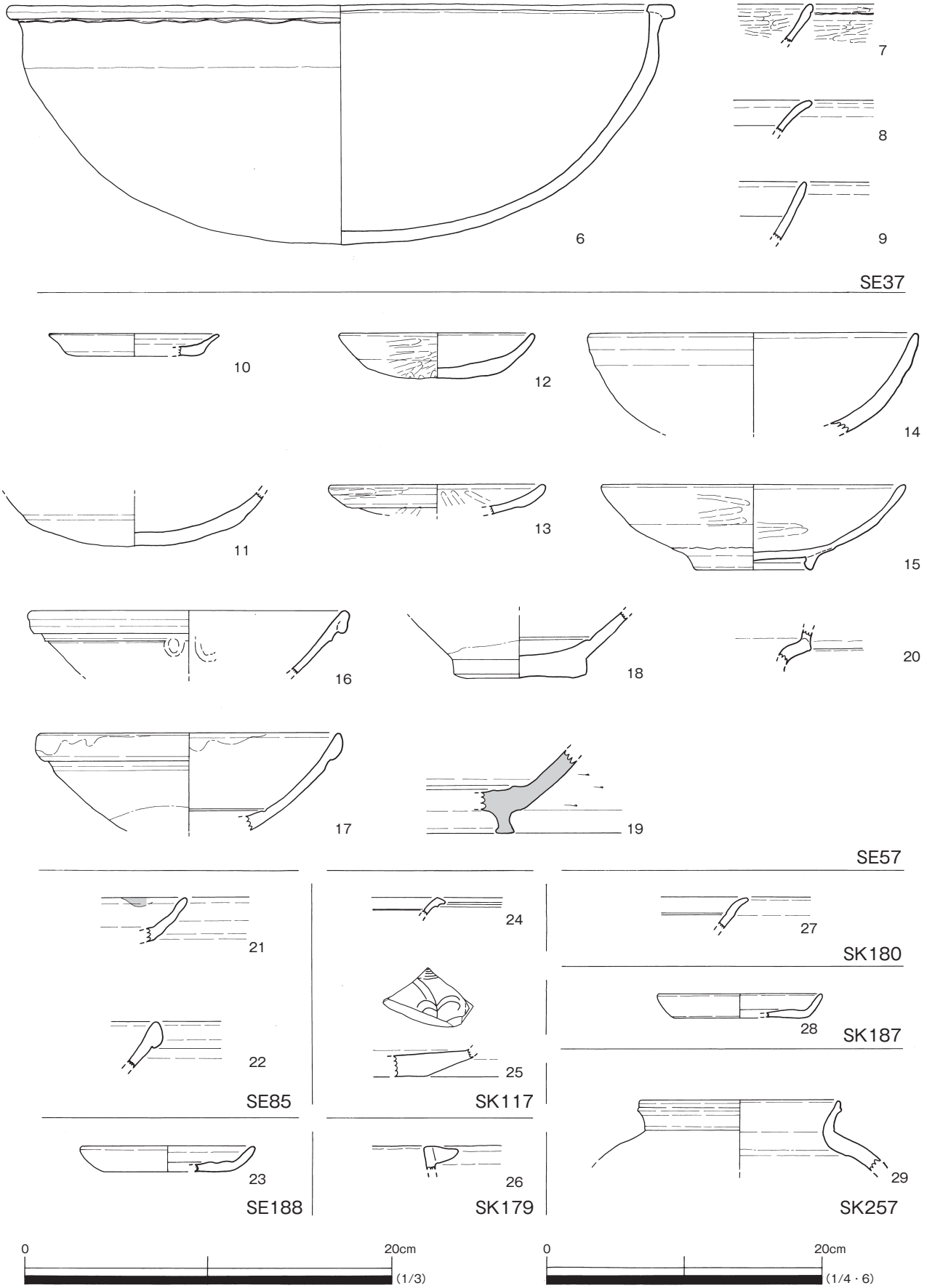


Fig.8　井戸および土坑出土遺物（1/3・6のみ1/4）

Tab.2　土坑一覧（長さ・幅・深さ—単位は cm）

No.	長さ	幅	深さ	備　　考	出土遺物
29	148	82	42	028 を切る	土、白Ⅴ、青、瓦質（足鍋？）
31	70	37	8		土、青（同安）
60	125	64	15		土
73	100	52	37	中央高まりは灰黄褐色粗砂だが、地山の可能性有	土（古墳中期か）
117	108	42	46		土（糸切底等）、白、青
124	103	56	17		土
125	93	61	19	122 を切る	土
126	(114)	85	42	125・127 を切る	土、白Ⅳ
127	(51)	(41)	19		土
128	110	81	32	129・130 を切る	土、須、陶（中世後期以降）、青（12C）、黒曜
133	139	68	30		土、須、白、黒曜
150	80	40	9		土、須
155	44	22	12	156 との切りあい不明	－
164	119	43	10	ピットと溝の切りあいの可能性	土（糸切底等）、青
179	101	76	23		土、須、白、弥（前期末～中期初頭？）
180	101	43	26		土、白（Ⅴ？）
184	115	(30)	8	185 と一連の可能性	－
185	120	90	11	底面やや凹凸	土、白、陶
186	82	81	26	187 を切る	土、白
187	85	68	23		土（12 ～ 13C Ⅲ）、陶
197	124	83	11	198 と一連の自然痕跡の可能性	土
256	68	37	17		土
257	89	44	17	底付近に小石多数	陶

SE188（Fig. 7・8　PL. 3）

調査区北側で検出した径 1.3m、深さ 0.5m 程の井戸状遺構。平面はほぼ正円で、断面も整ったすり鉢状を呈す。埋土は全体的に大きめの地山ブロックが多く混入し、掘削後あまり時間を置かずに埋められた可能性が高く、湧水もしない。

出土遺物は土師器・瓦器。23 は土師器Ⅲで底部糸切。復元口径は 9.2㎝。遺構の時期は 12 世紀中頃～後半か。

5．土坑（Fig. 8・9　PL. 4）

法量などは表に示す。23 基の遺構を土坑と認定したが、埋土や軸などで溝状遺構と共通性があり、区別し難いものもある。

土坑出土遺物

24・25 は SK117 出土の白磁。24 は碗Ⅵ類か。25 はⅢⅧ類。遺構の時期は 12 世紀中頃～後半か。26 は SK179 出土の弥生土器甕。前期末～中期初頭で紛れ込みか。27 は SK180 出土の白磁で、碗Ⅴ類か。28 は土師器Ⅲ。底部糸切で復元口径 8.8㎝を図り、12 世紀後半頃か。29 は SK257 出土の小壺。焼成は須恵質で、胎土は径 1㎜以上の砂粒を含まない。肩部内面のみに黒褐色～赤茶色の釉がかかり、強いロクロナデがみられる。産地は不明だが、遺構の埋土から中世のものか。

6．溝状遺構（Fig. 10・11）

出土遺物などは表に示す。83 条の遺構を溝状遺構と認定したが、埋土や軸などで土坑と共通性があり、区別し難いものもある。SD121・122・142 は SB297 の項で記述した。多くが SB297 や井戸と同じく 12 世紀前半～中頃のものと考えられ、側面の壁は直立～ややオーバーハング気味なのに対し、溝端部の壁はゆるやかなものが多い。埋土はほとんどが A で、深いものでは、上層に地山の混じりが少ないのに対し、下層は地山ブロック主体層になるものが多い。

Fig.9　土坑および柱穴（1/40）

Tab.3　溝状遺構一覧

No.	備　　考	出土遺物	No.	備　　考	出土遺物
4		ー	152	143と一連か　153との新旧不明	土
7		土、白	153		土、黒曜
10A		ー	160		土、白Ⅳ
16		土、白（瓦玉）、陶、黒曜	161		ー
17		土、白、須	163		土、白（中世後期以降）
21B		ー	165		土
24		土	168	181に切られる	土
26		土	169	170・171と並列	土
32		土	170		土
33		土	171		土、黒曜
42		土	172		土、染
47	048との新旧不明	土、青	173		ー
48	047との新旧不明　049を切る	土	174	埋土Ｂ	土
51	050を切る	土、陶、黒曜	175A	175Bを切る？	土(高台埦等)
54	055を切る	土	175B	269と一連か	土
56	271・176と一連？	土(丸底杯・糸切底等)、白、瓦質、陶、黒曜	176		土、青
61		土、黒曜	177		ー
63	064～066に並列	土	181	182との新旧不明	土、陶、高麗、弥（鋤先口）
64	65·66·163·294·287·173と一連?	ー	182		土
65		土	189		土、黒曜
66		ー	205		土
77		土、砥石	206		土
78		土、黒曜	211		土
79A	079Bを切る（掘り直し？）	土、白(Ⅳ·Ⅴ等)、須(糸切底)、染	217		ー
79B		土(高台埦等)、須(糸切底)、白、青、瓦質	219		土、瓦器、白
98		土（糸切底等）、須	225		ー
99	100と一連か	土	226		土
100		土、瓦器	227		土(12C頃)、瓦器、白、青(盤？)、陶
114		土（糸切底等）、須	231		土、瓦器、陶（唐津？）
115		ー	254		ー
116		土	255		ー
118		土（糸切底等）	269		土、白Ⅳ、弥
121	120を切る　122と並列	ー	270		土(高台埦等)、褐釉陶
122		ー	271		土、白Ⅳ、須
130		土	275		土、瓦器、青（同安）、陶
138		土、須	276		土、黒曜
139		土、瓦器	277		土
141		土	287		ー
142	未図化だが、掘り直しの可能性	ー	288		ー
143		土、白Ⅳ、青（同安）	289		ー
148		土、ガラス	294		ー
149		ー			

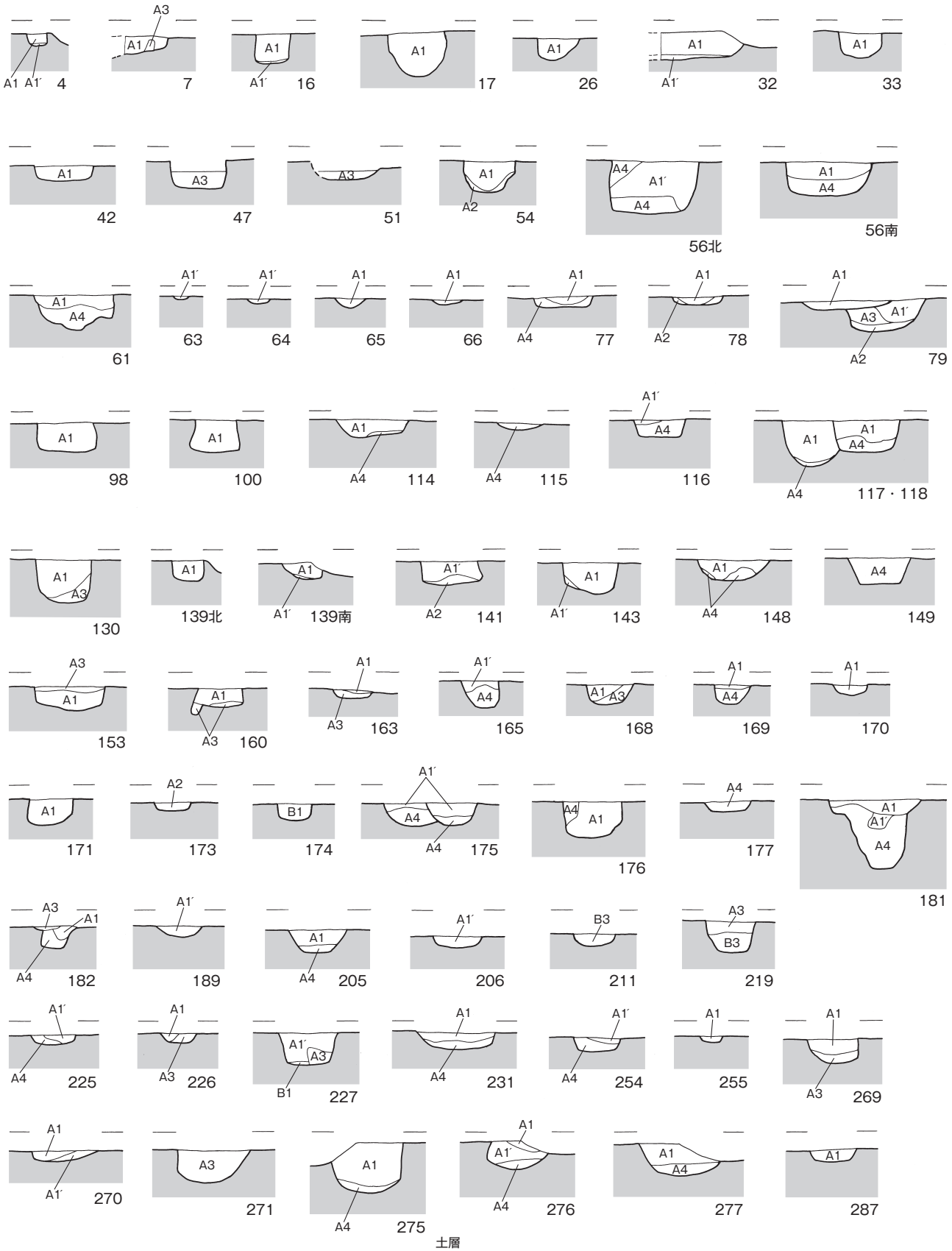
SD79

調査区の南西端で6m程を検出した南東―北西方向の直線溝で、両側が調査区外に伸びる。幅0.6m・深さ5cm程の浅い溝（SD079A）が、幅0.6m・深さ25cm程の深い溝（SD079B）を切り、掘り直しと考えられる。調査区西側は旧地表面から大きく削られていると想定されるため、本来の深さは50cm以上はあっただろう。底のレベルはほぼ平らで北西端部より南東端部が3cm程下がる。区画溝だろう。

出土遺物はSD79 AとSD79 Bとに分けたが、上層をまとめてSD79 Aとして取り上げたので、多少混じりがある。土師器・糸切底の須恵器・白磁・青磁・染付（紛れ込み？）等が出土。30・31がSD079A出土で、32がSD079B出土。30は須恵器で、底部糸切のため東播系か。31は白磁Ⅲ Ⅸ類（口禿）で、13世紀後半～14世紀前半。32は備前焼擂鉢。灰色（N5/ ）。14世紀中頃～後半。遺構の時期は14世紀中頃か。

溝出土遺物

33はSD16出土の白磁瓦玉で、見込み部分の釉を輪状に掻きとり、Ⅲ Ⅲ類を加工したものか。34～36



土層
A…暗褐色（7.5YR3/3）粘質土　　B…黒褐色（10YR2/3）粘質土
1…地山の混入がない　　1′…地山粒がわずかに混入　　2…地山粒が混入
3…地山ブロックが混入　　4…地山ブロック主体層で隙間に A や B が入る
※標高基準線は全て 5.30m
全て北からもしくは東から（図の左が東もしくは南）の図。ただし、SD79 のみ南東から

Fig.10　溝状遺構土層（1/40）

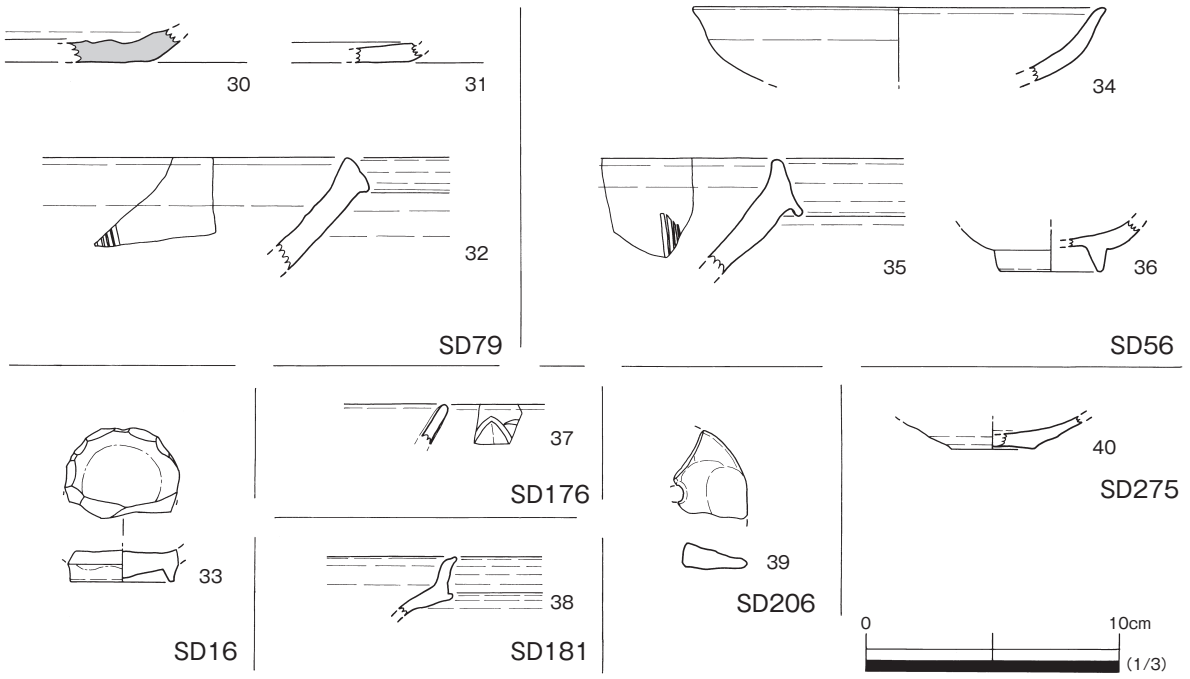


Fig.11　溝状遺構出土遺物（1/3）

はSD56出土。34は土師器丸底坏。35は備前焼の擂鉢。焼成は須恵質に近く、口縁部外面にやや灰がかぶる。灰色（N7/ ）。14世紀後半頃。36は肥前陶器小碗で、紛れ込みか。オリーブ黒色（5Y3/1）の釉がかかり、断面は淡赤橙（2.5YR7/4）。37はSD176出土の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、時期は13世紀代。38はSD181出土の陶器で、断面が赤っぽい紫色（灰赤色10R4/2）なのに対し、器表は青っぽい暗灰色（N4/ ）に発色する。高麗無釉陶器の壺である可能性が高く、11世紀後半～12世紀前半か。39はSD206出土の土製品で、穿孔がある。紡錘車か。40はSD275出土の白磁皿Ⅵ類で、内面の釉は擦り減ってほとんど残っておらず、表面がスベスベしている。

7．不明遺構

SX101（Fig. 12　PL. 4）

調査区南西側で検出した平面2.7 × 1.4m、深さ10cm程の浅い遺構。平面のプランは凹凸がなく、整っていたが、床面は凹凸が激しい。埋土Bの黒色土が堆積する。小さな畑か何かだろうか。

出土遺物は土師器（鍋片や古墳時代土師器を含む）・中世須恵器・瓦器。41・42は土師器。41は皿で、復元口径6.6cm。時期は16世紀後半以降で、紛れ込みか。42は埦で、12世紀前半頃。43は瓦器皿で、復元口径10.8cm。底部は回転糸切。44は底部糸切の須恵器で、東播系か。内面が擦られ滑石のようにスベスベする。

8．柱穴

底の標高や柱痕の有無などは表で示す。埋土Aのピットはほとんどが中世のものだろうが、調査区の北側に埋土Bのピットが比較的多く存在し、古墳時代の土器が多く出土する傾向がある。

柱穴出土遺物（Fig. 13）

45はSP070出土の砂岩製置き砥石で、根石に転用されたもの。擦面を矢印で図化したが、方向は明確でない。灰黄色（2.5Y6/2）。46はSP194出土の白磁。外面のみ薄く施釉され、色調は釉が灰白色（7.5Y8/2）、内面・断面が灰白色（7.5Y8/1）。天地は不明。47・48はSP218出土。47は土師器甕

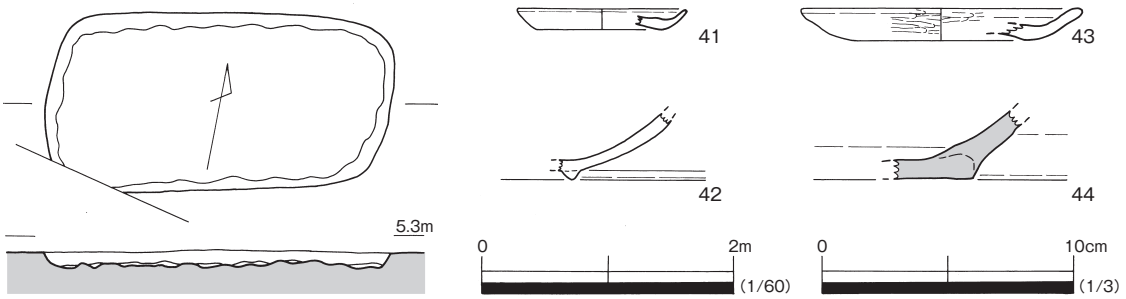


Fig.12　SX101（1/60）と出土遺物（1/3）

の小片で、内面に径 5㎜以下の赤い斑点状のシミがある。48 は土師器高坏で、時期は古墳時代中期初頭～前半。49 は SP235 出土の土師器甕で、時期は古墳時代前期前半。

９．その他の遺物（Fig. １４）

表土や攪乱出土の遺物である。50 は調査区東側の攪乱から出土し、SD181 出土の 38 と同様に、断面が赤っぽい紫色（灰赤色 2.5YR4/2）なのに対し、器表は青っぽい暗灰色（黒色 5Y2/1）に発色する。11 世紀後半～ 12 世紀前半頃の高麗無釉陶器壺の可能性が高い。51 は東側攪乱より出土した朝鮮陶器（粉青沙器）の小片で明オリーブ灰色（2.5GY7/1）の釉の上から口縁部の内外に刷毛で白泥（灰白色 5Y8/1）を施すもの。調査区南西隅部の表土剥ぎ中に出土した 52 も刷毛目を施した朝鮮陶器（粉青沙器）の小碗で、復元口径は 8.8㎝、器高 3.4㎝。時期は 15 世紀後半～ 16 世紀前半頃か。53 は東側攪乱出土の黒耀石の使用

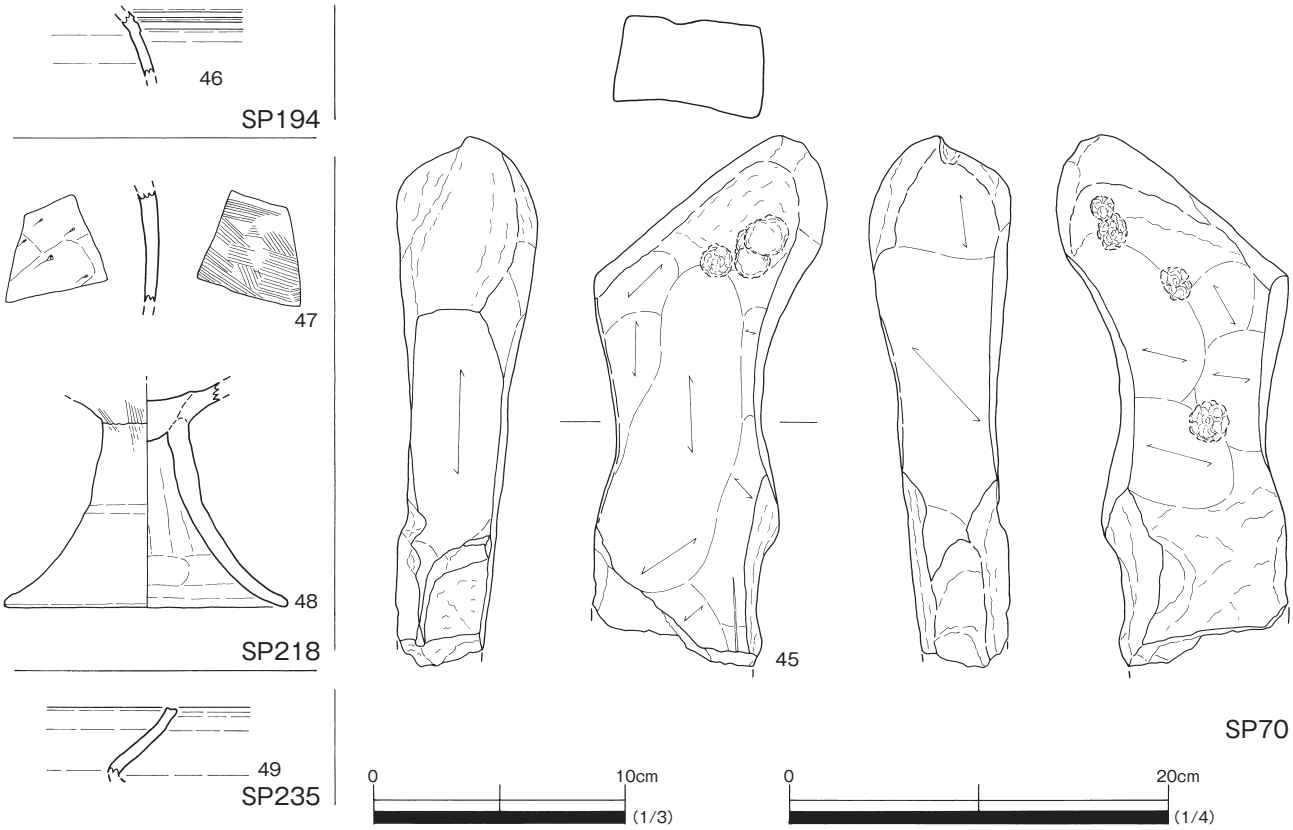


Fig.13　柱穴出土遺物（1/3・45 のみ 1/4）

Tab.4　柱穴一覧

No.	底L	柱	土	備　　考	出土遺物	No.	底L	柱	土	備　　考	出土遺物	No.	底L	柱	土	備　　考	出土遺物
3	5.10	△	A		―	92	5.17	△	A	093を切る	―	214	5.06		B		―
5	5.13		A		土	93	5.14	△	A		―	215	5.06		B		土
6	5.10		A		土	94	5.15		A		―	218	4.82		B	上部は撹乱埋土	土（古墳中期）
8	5.08	△	A		―	95	5.13	○	A		―	221	5.11		BA		土
9	5.10		A	059を切る	―	96	5.14		A		―	223	5.16		B		―
10B	5.05		A		―	97	5.15		A		土	228	5.00		B		―
11	4.86	○	A		土	102	5.09		A		土	229	5.11		B		土
12	5.01		A		―	103	5.18		A		―	230	5.13		B		―
13	5.03	△	A		土	104	5.17		BA		土	233	4.98		B		―
14	5.14		A		―	105	5.18		B		土	234	5.11		B		―
15	5.04		A		―	106	5.18		B		―	235	4.92		B		土（古墳）
18	5.01		B		―	107	5.08	○	B		―	236	5.17		B		―
19	5.10		A		土	108	5.04	○	A		―	237	5.02		B		―
20	4.87		A		土、青（15C 頃）	109	5.21		A		―	238	5.03		B		土、黒曜
21A	5.10		A		―	110	5.09		A		―	239	5.09		B		―
22	5.05		A		土、須	111	5.08		A		土	240	5.19		B		―
23	5.07		A		―	112	5.20		薄茶	樹根？	―	241	5.13		A		―
25	4.99		A		土	113	5.02		A		―	242	5.16		A		―
27	5.11		A		―	119	5.17		A		土（糸切底等）	243	5.08		A		土
28	5.03		A		―	123	5.05	○	A	122を切る	土	244	5.08		A		土
30	5.11		B		―	129	5.17		B		―	245	5.17		A		―
34	5.12		A		―	131	5.21		A		―	246	5.14		A		―
35	5.09		B		―	132	5.13	○	A	131を切る	―	247	5.17		A		―
36	4.96		B		―	134	4.83	○	A	055に似た埋土	―	248	5.03		A		―
39	5.18		A	038を切る	―	135	5.15		A		―	249	5.06		A		―
40	5.11		A	039を切る	―	136	5.03		B		―	250	5.04		B		―
41	5.15		A		―	137	5.12		A		―	251	4.98	○	B		土
43	5.05	△	A		土、白V	140	5.09		A		土	252	5.05		A		土、白
44	5.04	○	A	058を切る	―	144	5.11		A		土	253	5.16		A		―
45	5.15		A		―	145	5.06		A		―	258	5.06		B		―
46	5.11	○	A	45を切る	土	146	5.03		A		―	259	5.14		B		―
49	5.04		A		―	147	5.04		A		―	260	5.16		B		陶
50	5.08		A		―	151	5.16		B		―	261	5.11		B		―
52	4.98		A	051を切る	土（糸切底等）	154	5.14		?		―	263	4.83		B		―
53	5.05		A		土	156	5.17		?	155との切りあい不明	―	265	5.03		BA		―
55	4.62		A		―	157	5.09		B		―	266	5.13		A		―
58	5.07		A		―	159	5.07		A		土	267	5.18		B	219に切られる	―
59	5.11		A		―	162	5.16		?		―	268	5.16		A	150との切りあい不明	―
62	5.19		灰色	撹乱か？	―	166	4.85		B		―	273	4.99	△	B		―
68	5.11		B		―	167	4.91		B	181に切られる	―	274	5.04		A		―
69	5.17		B		土	178	5.03		B		―	278	4.69		A		―
70	4.97		B	砥石転用の根石	砥石	183	5.12		B		―	279	4.72		B		―
71	5.08		A		―	192	5.09		A	自然痕跡？	土	280	5.09		?	131との切りあい不明	―
72	5.01		A		―	193	5.02		B		土	281	5.06		?		土
74	5.13		A		―	194	5.13	△	A		陶	282	5.06		?		―
75	5.18		A		―	195	5.13		A		土	283	5.05		?		―
76	5.21		A	樹根？	―	199	4.97		B		土	284	5.06		A		―
80	5.02		A	樹根の可能性	土	200	4.84		B		土（古墳）	285	5.01		A		―
82	5.19		A		―	201	5.07		B		―	286	5.01		A		―
83	5.19		A	084に切られる	―	202	5.08		A		土	290	5.11		?		―
88	5.11		薄茶	樹根？	―	207	5.03		A		土	291	5.04		?		―
89	5.14		薄茶	樹根？	―	208	4.99		B		―	293	5.09		?	自然痕跡？	―
90	5.09		A		―	209	5.04		A		―	295	5.11		BA		―
91	5.12		A		―	212	5.08		B		―						

土（埋土）　A＝暗褐色　B＝黒褐色　AB＝AにBが混じる　BA＝BにAが混じる　？＝記録なし
柱（柱痕）　○＝明確に有　△＝不明確だが有
出土遺物　土…土師器（一部に弥生土器や瓦器などの可能性があるもの含む）
弥…弥生土器　須…須恵器　瓦器…瓦器　白…白磁
青…青磁　陶…陶器　染…染付　黒…黒曜石

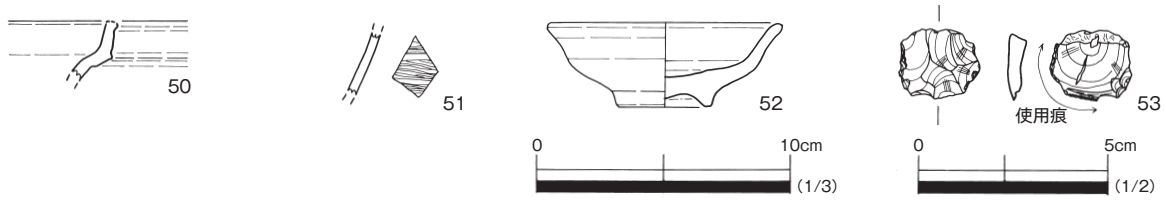


Fig.14　その他の遺物（1/3・53 のみ 1/2）

痕剥片。長さ 1.9㎝、幅 2.1㎝、厚さ 4㎜。二重パティナが観察され、片面にみられる使用痕と考えられる微細剥離よりも調整剥離面の風化が進むため、縄文時代の剥片を弥生時代に再利用した等の可能性がある。

１０．小結

本調査では中世前期を中心とする生活遺構を検出した。井戸や溝状遺構は青磁等をほとんど含まず、12世紀前半～中頃と考えられ、12世紀後半に少数の土坑が残る。多数検出した溝状遺構は壁が直角からややオーバーハング気味に立ち上がる点が特徴的である。深いものでSD56・271・176、SD143・181のように一直線上に並ぶ部分もあり（一本の溝の上部が削平され、深い部分だけ残った可能性もある）、調査区の北寄りでそれに直交する方向の溝もみられ、塀・垣等の何らかの区画の跡だろうか。ただし、同様な溝状遺構は30・31次でも検出され、1次の谷部（11世紀後半～12世紀の土器が出土）で水田を営み、それを囲むように少し高い場所で畑を営む構図はなんとなくしっくりくる感じもするので、耕作痕の可能性も考えておきたい。これまでの調査では、11世紀後半～12世紀中頃にかけての時期は微高地Ｂ上で建物や井戸等の明確な生活遺構は検出されていなかった。10次調査や22次調査などで遺構・遺物は検出されたが、この時期は溝が中心で、これを灌漑用水路とすれば生産域ともとれる。よって、本調査の溝状遺構が「区画」であるか、「耕作痕」であるかによって、当該期の微高地Ｂの土地利用の解釈が大きく変わってしまうため、今後の調査で慎重に判断していきたい。

この時期（12世紀前半～中頃）の原遺跡の中での中心は南側東寄り（28次・32次Ⅱ区・26次）である。28次・32次Ⅱ区では羽口・鉄滓・炉壁等の製鉄関連遺物や、瓦・天目碗等が出土し、また26次では初期龍泉・同安窯系青磁０類碗を副葬する土坑墓を検出した。これらの地点や本調査区、またやはり12世紀前半頃の井戸や建物を検出した北東側の２次では12世紀後半に集落が衰退し、わずかに土坑が残る点が共通し、これらの地点の連動性が伺える。これに代わって12世紀後半～13世紀前半に原遺跡の中心となるのは14・21・19・6・29次などの微高地Ａの北側で、この時期には10次・9次・17次など遺跡の広範に遺構・遺物がみられる。

また、3基の井戸で出土した焼石が注目できる。このような事例は東日本で多く報告され、埋井に伴う祭祀儀礼として投げ込まれたと考えられている（久世2005）。今後周辺の調査でも注意すべきだろう。

中世前期と後期の過渡期の遺構としてSD79がある。深さ25cm程だが、西側は大きく削平されていると考えられ、本来はかなりの幅・深さだったろう。口禿の白磁が出土したが、14世紀中頃～後半頃の備前焼も出土し、溝の時期は14世紀中頃位と考える。また、表土や攪乱から出土した朝鮮陶器は15世紀後半～16世紀前半頃の可能性が高い。9・22次地点が14世紀後半～15世紀前半を中心とし、27次地点は15世紀後半～16世紀前半を中心とするというように、中心とする時期にやや違いがあるが、34次地点の南東では14世紀後半～16世紀の大規模な方形区画が検出され、福岡市博物館所蔵の『小田部文書』に記載のある金丸氏の居館ともされる（山崎2012）。SD79もこれに関連するものだろうか。ただし、25次では13世紀後半～14世紀前半の建物も検出され、この時期の集落に関連するものかもしれない。

※遺物に関し、以下の方々にご教示を賜った（順不同、敬称略）。また、時期比定などで主に以下を参考にした。
板倉有大　榎本義嗣　大庭康時　久住猛雄　田上勇一郎　山崎龍雄

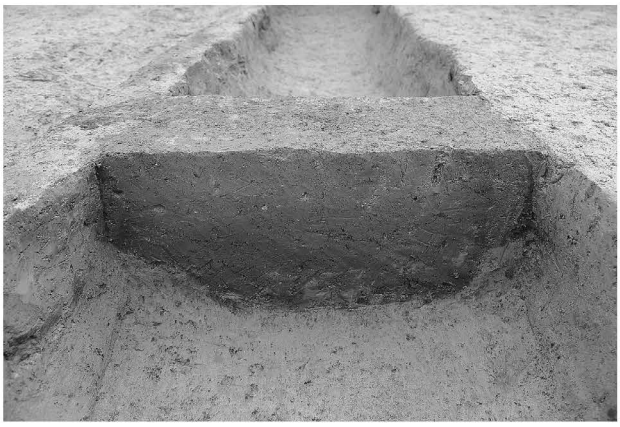
赤司善彦1991「朝鮮製無釉陶器の流入―高麗期を中心として―」『九州歴史資料館研究論集16』
楠瀬慶太2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相―博多遺跡群の土師器編年―」『九州考古学82』
久世康博2005「井戸はどうして埋められたか（焼石を入れる）」『龍谷大学考古学論集Ⅰ』
堀内明博1993「日本出土の朝鮮王朝陶磁」『MUSEUM（東京国立博物館研究誌）503』
宮崎亮一編2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財　第49集
山崎龍雄2012「３．まとめ」『原遺跡15－第27次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1168集
山本信夫1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』

（1）調査区全景（東より）

（2）南壁土層（北西より）

（1）SB296（北より）

（2）SD121・122（SB297 付属溝・北より）



（3）SD121 土層（北より）

（4）SD122 土層（北より）

（5）SC86（北東より）

（6）SD56 土層（北より）

（7）SD79 土層（南東より）

（8）SE37（北より）

（1）SE37 土層（北より）

（2）SE57 土層（北東より）

（3）SE57（北より）

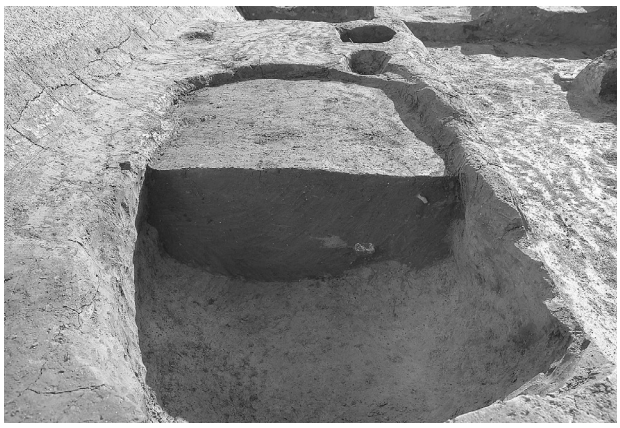
（4）SE57 断面（北東より）

（5）SE84（北より）

（6）SE85（南より）

（7）SE188 土層（南東より）

（8）SE84・85・SD79（北東より）

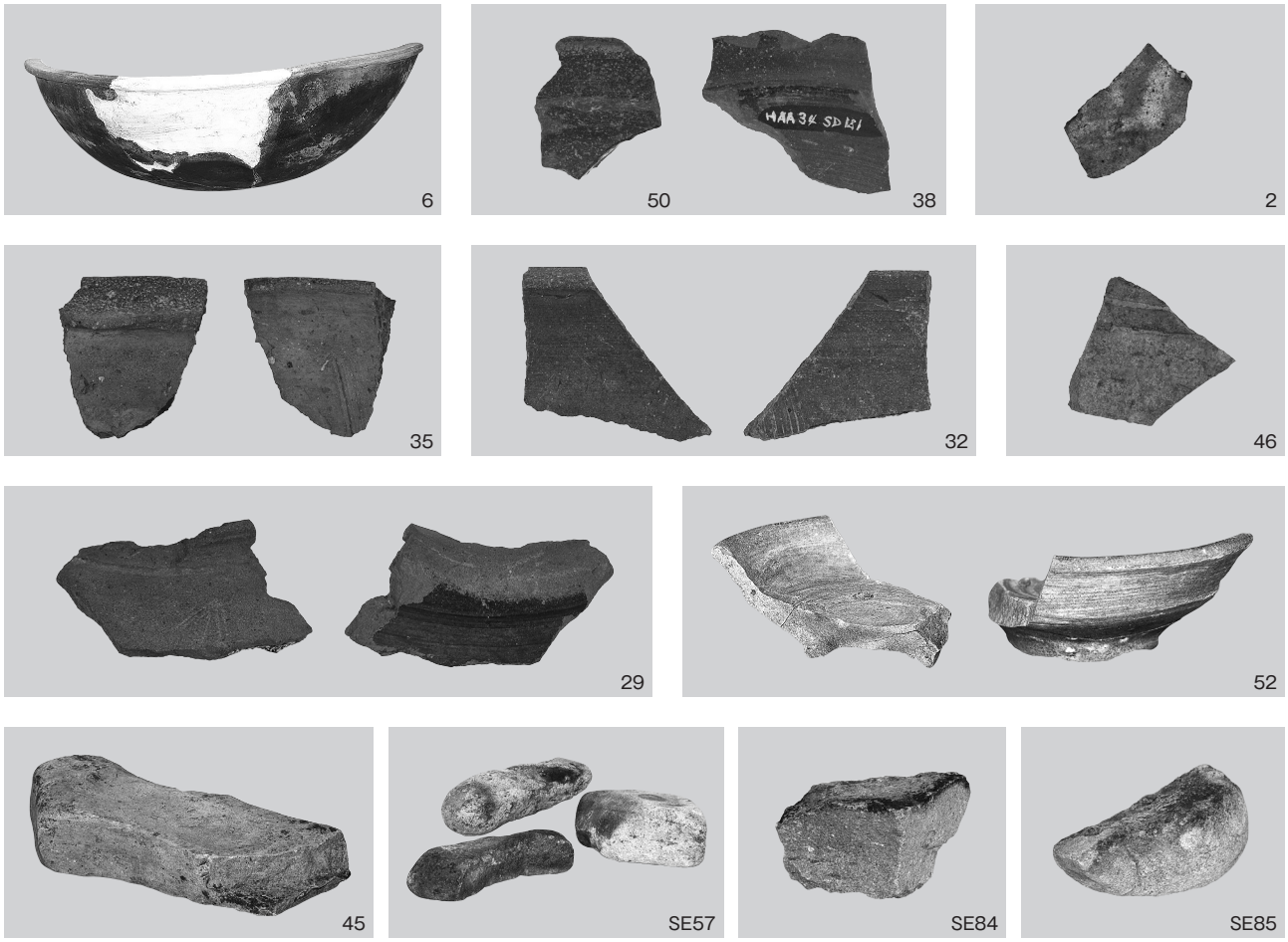


（1）SK29 土層（北より）

（2）SK257（東より）

（3）SX101（北東より）

（4）SP70（北東より）



（5）出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はらいせき
書　　名	原遺跡２０
副 書 名	―第３４次調査―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１３０４集
編 著 者 名	朝岡俊也
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒８１０－８６２０　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2017 年 3 月 27 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はらいせき 原 遺 跡	ふくおかけん 福岡県 ふくおかしさわらく 福岡市早良区 はらろくちょうめちない 原６丁目地内	40137	0311	33° 33'48"	130° 20'28"	20151013 ～ 20151202	520㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原 遺 跡	集落	古墳 / 中世	古墳 - 掘立柱建物１＋竪穴建物状遺構 1/ 中世 - 掘立柱建物１＋井戸状遺構５＋溝＋土坑	古墳 - 土師器 / 中世 - 土師器＋陶磁器	

要　　約	原遺跡は早良平野を流れる室見川中流東岸に位置する。遺跡内には南北に伸びる二つの微高地があり、本調査区は従来この間の低地にあたると推定されていた。しかし調査の結果、西側の微高地がやや東に張り出して安定した地盤があると明らかになると同時に、中世の井戸や古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物などを検出し、中世や古墳時代の居住域がここまで広がっていたと明らかになった。 中世の土器をはじめとし、弥生時代前期末～中期初頭・後期、古墳時代前期・中期・後期、近世などの土器も出土したが、全体的に出土遺物は少なく、大人数で継続的な居住はなされなかったのだろうか。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1304集

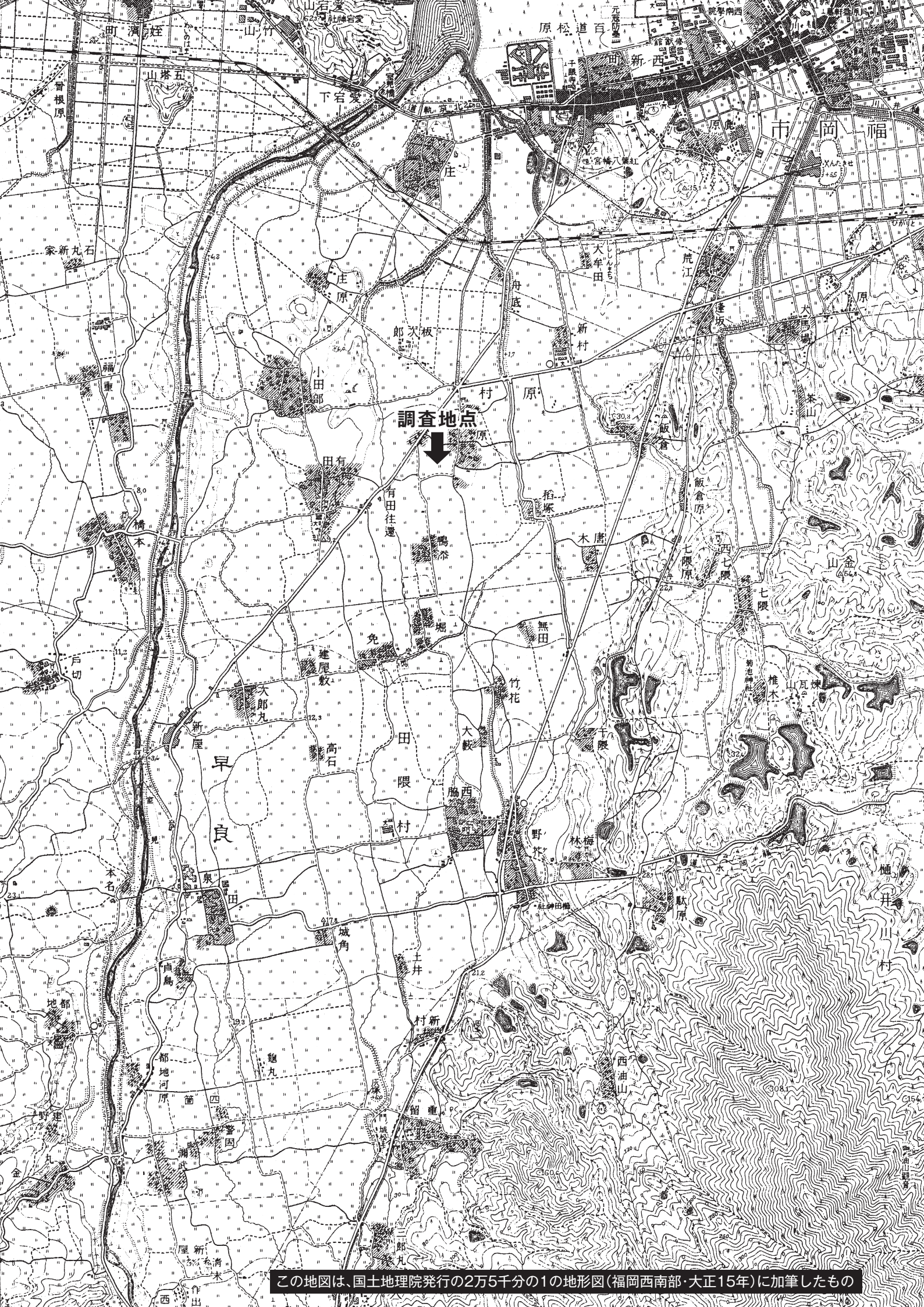
原遺跡20

―第34次調査―

2017年（平成29年）3月27日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵３丁目 21-10


調査地点
福岡市
下宮
新村
荒江
犬馬場
飯倉
飯倉原
稲塚
木唐
七隈原
西七隈
七隈
山金
無田
竹花
大藪
脇西
林梅
野
椎木
山瓦
菊池神社
駄原
樋井川村
西油山
留重
新村
土井
城角
泉田
本名
早良
田隈村
高石
建尾敷
大郎丸
新屋
免
堀
有田往還
有田
橋本
戸切
地都
貞島
亀丸
都地河原
四箇
警固
湧武
野建
金丸
新屋
清木
作出
三郎丸
西
舟底
庄原
小田郎
次板
福重
家新丸石
冒根原
山塔五
山竹
濱姪
町
山岩愛
下岩愛
庄
宮崎八幡社
千眼寺
新西町
原松道百
館武修
院学南西
原鹿
大牟田
ししんまち
達坂
茶山
原
ひかりとり
井川村
城角
貞島
土井
新村
留重
三郎丸
西油山
308.1
360
154
35.1
64.8
22.3
32.
28.
21.2
19.3
17.8
12.3
11.2
8.0
4.3
1.7
30.8
15.1
6.5
23.1
13.4
9.7
5.0
3.9
2.8
1.7
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
0.3
0.2
0.1
0.0
-0.1
-0.2
-0.3
-0.4
-0.5
-0.6
-0.7
-0.8
-0.9
-1.0
-1.1
-1.2
-1.3
-1.4
-1.5
-1.6
-1.7
-1.8
-1.9
-2.0
-2.1
-2.2
-2.3
-2.4
-2.5
-2.6
-2.7
-2.8
-2.9
-3.0
-3.1
-3.2
-3.3
-3.4
-3.5
-3.6
-3.7
-3.8
-3.9
-4.0